

16歳で満州に、そしてシベリアへ

高橋信吉 鹿沼市

●満蒙開拓青少年義勇軍（注）に参加

14歳から、18歳までが義勇軍の応募資格でした。私は尋常科6年の義務教育の後、小学校の高等科に2年行き、卒業後2年間勤めていましたので、16歳で参加しました。私は志願でしたが、当時は国策でしたから、志願とはいえ、先生の勧めも強い傾向にありました。

16歳で満州に行くこうと思ったのは、8割は天皇陛下とお国のため。そして後の2割は土地をもらいたかったからです。貧乏な小作農民のせがれでしたから、3年の訓練を終えると20町歩（約100坪四方の20倍）の土地をもらえるとというのは魅力でした。ですから全国の次男や三男、貧農が大勢志願して満州に行ったのです。

満州に行く前に、茨城県の内原に満蒙開拓青少年義勇軍内原（うち原）訓練所に行きました。訓練期間は3か月、6か月、12か月の三つあり、私は6か月だったので3月に入所し、9月に満州に渡りました。

●満州での暮らし

孫呉（そんこ）はソ連国境に近い北緯50度の北の方の町で、さらに北の黒河（こっか）から7キ

ぐらい奥に入った所に、満蒙開拓青少年義勇軍大額（だいがく）訓練所がありました。義勇軍というのは県ごとのセミ軍隊組織なのです。ですから、いざという時のために軍事教練をやったりしていました。

栃木県からは1個中隊235名でしたが、東北地方などでは貧農が多かったので一つの県で2、3個中隊がありました。この訓練所は静岡県の2個中隊が2年間の訓練が終わって開拓団に移行していった後で、そこにわれわれ栃木県人の1個中隊が、50名くらいずつに分かれて入りました。この大額訓練所は北緯50度で、訓練所の中でもいちばん北に位置するようでした。

当時は16歳の子供ですから、他国を侵略しているという意識はありませんでした。あとでソ連に連れて行かれて社会主義の、それなりの教育を受けて、日本の国のしていることの意味を知ると、ということはありません。

最初は、大額訓練所の郵便局で仕事をしていました。義勇軍というのは、農業ばかりしているわけではなく、三分の一は学生です（学科はせいぜい国語と数学で、科学のようなものはありませんでした）。三分の一は軍事訓練、三分の一は農民。

私は訓練所の本部詰とか郵便局の勤めとか、割にペンを持つことのほうが長かったです。3年間の

訓練が終わればそこを出て、どこかの土地をもらって義勇隊開拓団ということになるはずでしたが、そこまで行かないうちに終戦を迎えました。

●ロシアに連れて行かれる

ソ連が国境を越えて侵入してきたのは8月9日で、私たちが大額に来てから、1年と11か月たっていました。

みんな黒龍江を越えてソ連側に連れて行かれたのですが、国際法で捕虜にできない年齢があるようで、年齢を確かめてから、中国に帰された仲間もいました。ところが、後々そういう連中はひどかったようです。帰されると、『大地の子』の小説のように、日本の孤児を可愛がって育ててくれた中国人もいましたが、これは少数です。あまりにも日本人が、旧満州、中国本土でひどいことをしていたから、ソ連から戻された年の若い連中は、今度は仕返しをされたり、ひどい目にあつた。

向こうで死んだ者もずいぶんいます。鹿沼から行った14歳の3人、一人だけ帰ってきて今も存命ですが、後の2人は明らかではなく、死んでしまったようです。だから私たちのように、ソ連に連れて行かれてしまったほうが、かえって安全は保証されて、結果としては良かったということになった。

●炭鉱での仕事

国境のアムール河をはさんで、おおよそ黒河の対岸のギヴダという炭鉱の町に連れて行かれました。そこは石炭の層が2層になっている大規模採掘場でした。層になっている石炭に穴を開けてダイナマイトを仕込み、ドカンと爆発させる。スコップを使って粉々になった石炭をトロツコに詰め込む、ここまではロシア人の連中の仕事。その後、坑道掘りした石炭がコンベアで流れてくるので、我々はそのベルトの両側に腰掛けて選炭をしました。石炭でない石なんかも混じるので、それを選び分けて捨てる。きっちり8時間、薄暗いところで続けました。退屈で眠い作業でした。

9か月くらいやっていましたが、食事の量が少ないうえ同じものばかり食べていたせいか、そのうちに栄養失調になってしまいました。当時のロシアの国営農場（ソホーズ）に行かされ、今度はそこで農業の手伝いをしました。そこではたくさん食べられたので、栄養失調から回復することができました。

集団農場には9か月いて、次にライチハという露天掘りの炭鉱の町に行かされました。ここでは直接石炭を扱うことはなかったです。ここは炭層が厚いので、パワーショベルを使って、60トという日本では考えられないような巨大な貨物列車に、掘った石炭を積むんです。日本人の捕虜がや

らされた仕事は、一筋掘り終わったあと、この貨車の線路を横にずらす作業でした。せーの、とみんなでやった。石炭を掘る、線路を寄せる、を繰り返すわけです。そこではもっぱら、そんな作業をやっていました。

●捕虜生活のなかの楽しみ

ライチハは大きな収容所で、日本人の捕虜だけで3000人くらいいました。日本での職業もさまざまで検事もいれば医者もいる、大工もいれば農民もいる。だから生活そのものは、お互いに得意なものでも協力し合い、日本人の社会を築いていました。

そのうち、労働以外にも何かやろうじゃないかというので、劇団や楽団を作ったりしました。私は歌が好きなものですから、「音楽の好きな者、集まれ」と言われて、私より一歳上の、日本に帰ってから歌手会長などをやったコロンビアレコードの青木光一の前でドレミファソラシドの試験をやりました。彼は捕虜になる前は中国の奉天（瀋陽）の放送合唱団で歌っていたらしいです。私は合格して、50、60名の合唱団の一員になりました。合唱団の活動は楽しかったです。ロシア民謡はいっぱい覚ええました。他にもロシア語を勉強したりする小さいグループもありました。

TVなどを見ると、シベリアの強制労働の過酷

さなどを報道していましたが、幸いにも私はそれほど過酷な印象はありません。収容所ごとの仕事の監督者や配置によっても待遇はいろいろだったと思います。また、私は若かったから、乗り越えられたところもあると思います。全体に日本人も一生懸命やっていたと思います。ただ、逃亡されないように監視は常にありました。「マンドリン」と呼んでいたんですけど、自動小銃を抱えた警備員がいて、自由は奪われていました。満州、ソ連時代の体験は今になって思うと、がんばりとか、忍耐とか、今日までの人生に随分役に立ったと思います。

ロシア人は個人、個人はみんないい人でした。落語にある熊さん、八つあん、みたいな人が多く、ケンカつ早くて、手は出さないが、罵り合う。今になって思えば、懐かしいです。

●何を食べていたか

最初に連れて行かれた炭鉱掘りのギヴダというところは、坑道の中を小川のように流れている水があった。炭塵で真っ黒な水ですが、それしかないのです。炭塵を飲みました。食料は、だいたい小豆（アズキ）が主だった。それを少しもらって飯盒（はんごう）に入れた。それに塩漬けのサンマが半分くらい。それだけでは足りないので野草と水をいっぱい入れて量を増やして命をつなぎまし

た。

それで最初の半年で、私も含めて栄養失調の者が多数でました。当時のソ連を擁護するわけではありませんが、ソ連も農業が不作だったのです。現在のウクライナは、当時はソ連の穀倉といわれていた。しかしそこが凶作で、またシベリアの方は水害で麦がとれませんでした。

大豆畑は、コンバインで刈りとると地面に少し茎が残ります。それを集めて積んで火をつける。その後、みんなで足で踏んで消すんです。手に取ってふうふう吹くと煎豆ができています。私も真似してそれをやりました。じゃがいもの掘り残りなんかも、手で探って、食べましたね。

農場は楽しかった。トマトでもきゅうりでも食べられました。畑ではズボンの裾を足首のところ縛ると袋のようになりますから、小麦なんかをズボンの中に注いで持って帰った。アメリカの援助物資で缶詰があったので、その空き缶をもらって常にぶら下げて歩いていました。食べ物が入ったときには、いつでもそこに入れておけるようにしていたのです。

小麦が手に入ったときはストープで炒って食べましたが、腹が減っているものだから、かえって食いすぎてしまい、腹を壊したこともありました。

●社会主義教育

民主化運動、洗脳はしばしば行われていました。日本を社会主義の国にさせようと、日本に革命を起こさせるために、私たちに思想の教育をしたのです。学校の8年間の教育を受けただけで、当時の軍国教育で固まっていたが真つ白な画用紙の私でしたから、どんな色にも染まります。ソ連では「真実はこういうことなんだ」という思想教育を受けました。

●帰国すると

抑留から解放されて帰国することになりました。鉄道でハバロフスクに出て南に下がり、ナホトカから、昭和23年の9月1日に舞鶴に上陸。21歳になっていました。祖国の味をどうぞ、というので、出迎への船に積んであったのが梅干とたくさんあった。5年間も外地にいたものだから、懐かしい、嬉しいというより、その匂いが臭くてたまらなかつた思い出があります。

集団の引き上げ列車で品川まできたら、品川の駅のホームが赤旗の波でした。昭和23年というのは、共産党が日本で非常に高揚していた時期で、共産党の衆議院議員が35人も並んで出迎えていてくれました。私らもすっかり思想教育されてきたから、日本へ敵前上陸だ、革命を起こして3年後に日本を共産圏にするんだ、なんて意気込みで

した。みんな真剣にその気になっていましたから。しかし、生活していくうちにだんだんそういう気持ちは薄くなっていきました。すんなり日本の暮らしに馴染んでしまったんです。いつの間にか、ありふれた一介の日本人になっちゃいましたね。日本では、当時の共産党の主義、主張が国民に容れられなかったということでしょう。日本はあくまでも選挙で、昔のロシア革命や中国のように鉄砲などを使って国を変えようとはしませんから。

●今の世の中って

同年の同級生などに会うと悲憤慷慨ですよ、今の世の中なっちゃないって。若いものは自由でもありませんものね。私らの時代はその反対で厳しすぎたかもしれないですけど、そういう教育で育ったから。自由放埒っていうか、私から見ればいい加減な人間がいっぱい増えた。がまんする、耐えるってことができない。これからの未来を背負う子供たちを導く、教育する大人でさえそう見える。みんな支え合い、助け合い、補い合って暮らすのが集団生活で、その中にはやっぱり社会規範があるはずなんですよね。

子供のうちには「他人には迷惑をかけない」とか「まず自分の前によその人のことを考えろ」と教わったが、今はそうじゃないように見える。何人かで集まって相撲とったり、かけっこしたり、

喧嘩したり、そういう場所も見かけない。家の中で一人で遊ぶ時代だから。物は豊かになっただけで、一人ひとり、心は貧しくなったのでしょいか。

●戦争はダメ

今の世の中、平和ボケだと思います。もちろん平和が悪いわけではありません。70年間、日本は人を殺さなかったし、殺されなかった。これは立派なものだと思います。地球上を見わたすと、年中どこかでドンパチ、ドンパチやっている。やっぱり戦争はダメですよ。人殺しでしょう。人をいっぱい殺すと勲章をもらえる。戦争を始めるときはどちらか「平和のために」と言って殺すんですね。どこも必ずそう言うんです。

今日もTVのニュースで悲惨な報道を見ました。戦争というのは人を変えるんですね。ひどいことをしたという兵隊も、家に帰れば、いい父ちゃんなのにな。

●その後の人生

その後の人生に、当時の体験は大いに役立ちました。出世したわけでも、金持ちになっただけでもないけれど、振り返ってみれば、ぐうたらに暮らすことはなかったかな、と。

帰ってまもなく毛布を1枚もらったかな。平成元年、当時の宇野宗佑首相から抑留中の労苦に対し、慰労状と25万円を10年年賦でもらった。それ

に銀杯。

生きていれば嫌なこともあるが、やっぱり生きていて良かったと思う。あんなところで死んだら、あまりにも可愛そうだ。

注・満蒙開拓青少年義勇軍

昭和17年以降、戦局の悪化に伴う兵力動員で成人男性の入植が困難となり、15歳から18歳くらいの少年で組織された「満蒙開拓青少年義勇軍」が主軸となった。

満蒙開拓青少年義勇軍は、重要国策の一つとして昭和12年1月の閣議決定に基づいて、昭和13年1月に設立され、昭和20年終戦まで存続した。設立の狙いは、当時、建国日浅い満州に広がる未墾の地に青少年を送り出し、将来大規模経営の農業者を育成し豊かな農村を築きあげ、日満一体、民族協和の実をあげる事にあった。

義勇軍の訓練期間は3カ年、そのほとんどは現地訓練であったが、このうち2〜3ヶ月間基礎的訓練を行うためこの地に全国唯一ヶ所の内原訓練所が開設した。敷地は40ヘクタール、300余棟の日輪兵舎が林立し、常時数千人の若人が眉を上げ胸を張り、とおく大興安嶺の彼方に夢を馳せながら此の地に学んだ。

その総数86,530名。全国都道府県から選抜された15歳から19歳までの若人達であった。

国策における満蒙開拓青少年義勇軍の位置づけは「兵士予備軍」であり、彼らは農業実習とともに軍事教練を受け、軍事的観点から主にソ連国境に近い満州北部が入植先に選ばれた。(ウィキペディアより)



国鉄常磐線・内原駅から満州への出発風景
隊員が手にしているのは鋤の柄
(asahi-net2014.9.23より引用)